

坊農真弓

国立情報学研究所

## 研究環境古今東西 ～スーブの冷めない距離～

神戸大学の塚本昌彦先生からバトンをいただきました。神戸大学と聞くと胸が疼きます。なぜならそこは、私が大学院時代を過ごした場所だからです。

私は、大学院時代は神戸大学で院生をやる以外に、京都と大阪と奈良の間の京阪奈にあるATRという研究所でリサーチアシスタントもしていました。ATRの建物は、京阪奈という広々とした土地の特性を活かし、ワンフロアに2つほどの研究所が入っている、地下1階、地上3階の4階建てでした。私が座ったのは、大きな部屋の一角をパーティションで区切った1.5畳ほどの空間でした。L字に置かれた机にモニタとコンピュータを置き、背面に書類や実験器具などを置くことができるキャビネットがありました。この空間を区切るパーティションは肩より下くらいの高さで、椅子から立ち上げれば、誰かがパーティション越しに会話していたり、パーティションの合間にある通路を歩いていたたりするのが見えます。もちろん、話し声は筒抜けです。大部屋には50席ほど同じ大きさの座席があり、主任研究員などの肩書きを持った人も、リサーチアシスタントで数カ月滞っているだけの人もこの大部屋に座席をもらいます。みんな本当に個性的な面々ばかりで、きっと若手芸人の楽屋ってこんな感じだろうと一人ワクワクしていたのを覚えています。「隣の研究チームはもうすぐ面白い実験をするらしい」、「参加者を募集中らしい」などなど、さまざまな情報が日本語・英語問わず盛んに行き交います。修士号をもらったばかりでATRに置いてもらった私は、日々耳をダンボにして、「自分の得意なことを活かせるネタはないか」、情報収集に励んでいました。まさに「スーブの冷めない距離」で培った異分野融合の研究姿勢は、今の私の研究活動の礎になっています。

その後博士号を取得し、いくつかの場所でポスドクを経験し、私は就職の関係で研究する場所を東京に移しました。東京は人口が多く土地も足りないので、京阪奈のように大部屋を用意することはできません。しかし、世界有数の人口密集都市だけあってさまざまな考えを持った研究者に日々出会うことができます。昨日心理学者と議論したのに、今日は工学者と議論しているといったように、分野を問わずさまざまな研究者と最先端の議論をすることができるのです。私はポスドク時代、海外のいくつかの大学を見て回りましたが、アメリカは大学自体

が明確に推す学部や専攻があるように感じました。A大学は文化人類学が強い、B大学は実験心理学が強い、C大学は科学技術社会論（STS）が強いなどです。大学や大学院を受験する学生も、大学のポストを探している研究者もそれぞれ大学の特色をリサーチし、自分がそこに加わるべきかを吟味しています。日本にももちろん同じ傾向はあると思いますが、アメリカと日本の大きな違いは距離感です。アメリカで、ある特定分野の専門性の高い大学に行けば、もちろん第一線の研究者との出会いがあり、刺激がたくさんあるでしょう。一方で、そういった大学では重鎮の教授やその弟子がたくさんおり、その学問分野の限界をぶち抜くような新しい学際的視点を見つけ出すことは難しいかもしれません。その点、日本、特に東京を中心とした首都圏はいろいろな考え方を持つ研究者が共存状態にあります。首都圏自体がATRの大部屋のようにワクワクする空間になっているのです。大部屋に着席していなくても、「(魔法瓶に入れた)スーブの冷めない距離」で議論できるのが東京をはじめとする首都圏の特徴かもしれません。

けれども、SNSをはじめとするネット社会がここまで定着している今となっては、もはや首都圏にこだわる必要もないかもしれません。SNSを開けば、「誰かが新しい研究を始めた」、「面白い着眼点で議論を展開している」など、通りすがりでさまざまな刺激に触れることができます。そんな魅力的な情報に触れたとき大切なことは、「自分の考えを研ぎ澄ませておくこと」、「相手との効果的な共存の仕方を考えること」ではないかと私は最近思っています。ネット社会と現実社会の境界線が曖昧になってきた昨今、研究者は自分をいかに律するべきか、研究環境をどのように整えるのか、考える必要があるのではないのでしょうか。

さて、続きまして、私のATR大部屋時代の大先輩、角康之さんにバトンを渡したいと思います。私も角さんも今はATRの大部屋を出て、遠く離れた場所で研究活動をしています。久しぶりに会ったときかけられる言葉や角さんのオリジナルの考え方にはいつも大きな刺激を受けています。そんな魅力あふれる角さんの研究について、その思いをとことん語っていただけないかと期待しています。